第15回
2021 7/23.

可能態の限界
現実態という見方
growth, occupation, 社会

（レポート）

growth

未成熟
依存性
可塑性

⊖ イデア 可能性 ⇒ 欠如態

⊕ 発達 現実態

DE第4章

できていること＋次の課題

イデアの限界 ⊖

① まつり

アンテ・フェストゥム（分裂病）

ポスト・フェストゥム（うつ病）

木村敏『時間と自己』中央公論新社 1982年

② 障害のとらえ方
- 静かにしていられない
- 社会性がない
- ことばがでない

【理想を持つつらさ】 第48回

理想を持とうとするのはつらい。理想を持った瞬間、現実は問題だらけの〈悪い〉ものに感じられてくる。

「なりたい自分」という理想を持てば、「今の自分」は不完全なものに思え、自己肯定感が下がる。教育で「目的」「目標」という理想を持てば、子どもが何かができない、わからない子どもに見えてくる。「手はお膝でしっかり座る」を目標にした瞬間、それができない子どもは〈悪い子〉に見えてくる。研究で「仮説」という理想を持てば、研究対象が混沌とした不確定なものだと自覚される。

アドラーは、「ひとりの人間の振舞いはすべて彼が立てる目標によって確定される」観点から、精神、あそび、世界像、性格、感情、人間の型、問題行動（生活上の困難）など、さまざまな概念を検討し直した。個人心理学の原則を「精神生活のすべての現象は、心に抱く目標のための準備として把握されるべきである」とした。そして理想は「持つ」だけでなく、乳児期幼児期から、世界像などで「持ってしまう」もので、それがその後の理想の持ち方に影響すると考えた。

キルケゴールは、可能性を持ってしまうことが人間の根源的な〈不安〉と考え、その不安こそが可能性を現実性へ、そして必然性（運命）の把握にすすめるもので、不安に向き合い、利用することを提唱した。理想を持つことから進んで、どうすればその理想が実現できるか、現実的・必然的にとらえるまで不安は消えない。授業目標で言えば、それが〈現実的に〉達成できる授業展開（カリキュラム）が構想できるまで不安は消えない。

（研究部・加藤聡一）

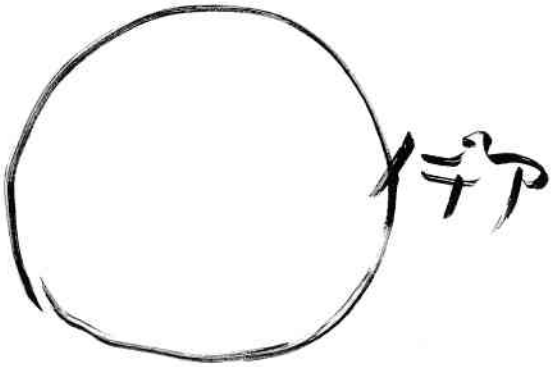
生活教育 eYe

参考文献

①アドラー（高尾利数訳）『人間知の心理学』春秋社、1987年（原著1927年）、186、106頁。

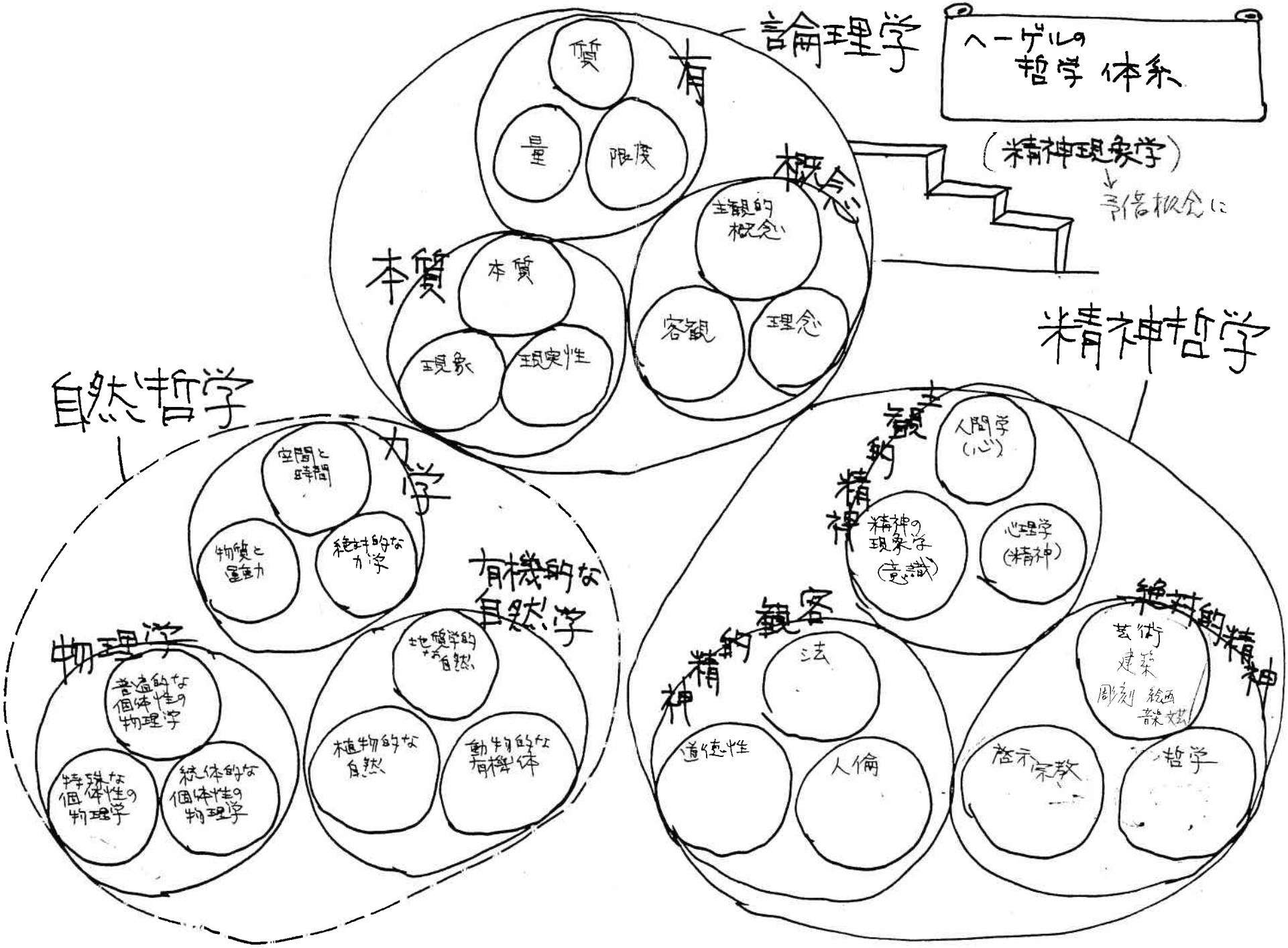
②キルケゴール（氷上英廣・熊沢義宣訳）『不安の概念／序文ばかり』白水社、1978年（原著1844年ほか）、79、80、231頁。

プラトン ― ヘーゲル



一と多　弁証法

ヘーゲルの哲学体系


論理学
有
質
量
限度
概念
主観的概念
客観
理念
本質
本質
現象
現実性
（精神現象学）
↓
予備概念に
自然哲学
力学
空間と時間
物質と運動
絶対的な力学
物理学
普遍的な個体性の物理学
特殊な個体性の物理学
統体的な個体性の物理学
有機的な自然学
地質学的な自然
植物的な自然
動物的な有機体
精神哲学
主観的精神
人間学（心）
精神の現象学（意識）
心理学（精神）
客観的精神
法
道徳性
人倫
絶対的精神
芸術
建築
彫刻 絵画 音楽 文学
啓示宗教
哲学

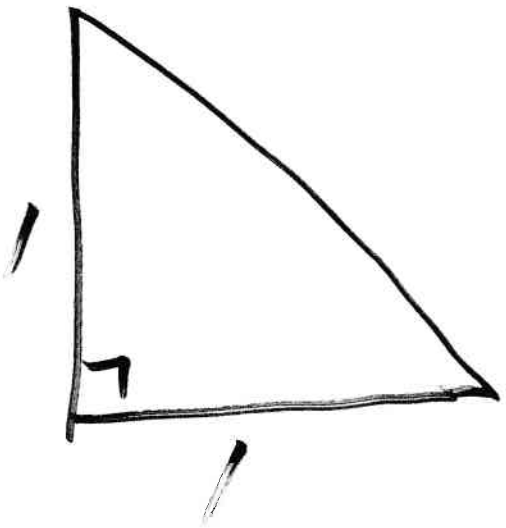
イデア批判

① 現実在在

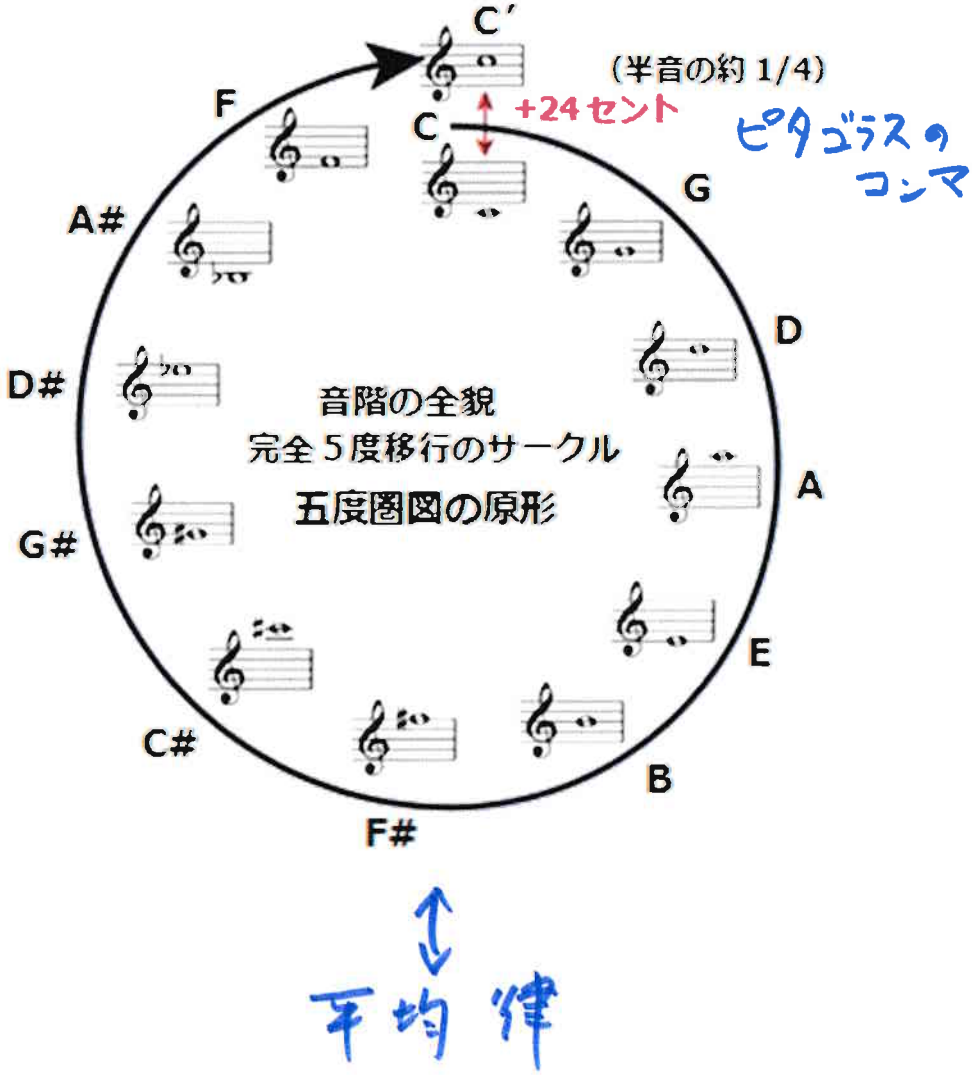
② かげの中にこそ

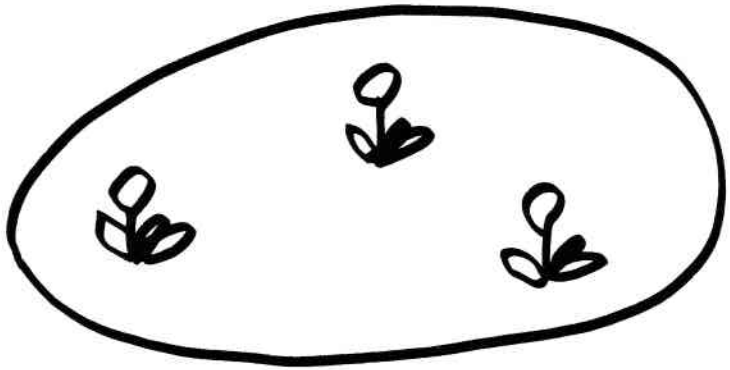
③ プラトンの中の不完全さ
ピタゴラス

ピタゴラス



無理数


C′
(半音の約 1/4)
+24 セント
ピタゴラスの
コンマ
C
G
D
A
E
B
F#
C#
G#
D#
A#
F
音階の全貌
完全５度移行のサークル
五度圏図の原形
平均律



3　新教育と《オキュペーションズ》

（1）『学校と社会』（1899年）をめぐって

分裂の時代にあって，《総体性＝全体性＝統一性の回復・更新・実現》をデューイはめざしたが，教育の場においては，とりわけ，学校が，人間自身の，そして子ども自身の必要性から分裂・遊離していることに問題を見た。

開拓時代の「大草原の小さな家」には，水くみやろうそく作りなど生産活動があり，家族は小さいながら一つの共同体であった。子どもにも切実な必要性と役割があり，生活の中で子どもたちは学び成長した。デューイは，それらを

思い起こしつつ，学校にそのような活動，つまり料理，編み物，裁縫，木工，金工，栽培などを導入しようと提案した。

導入してみると，子どもたちが生き生きと活発になり，表情が明るくなり，騒がしくなり（活発に話し合う），学校の雰囲気が一変した。ここには人間の本性・内なる自然（human nature）に即した「何か」確かなものがあるとの直感・実感は，世界中の同じような試みを始めた実践家たちに共有されるものだった。

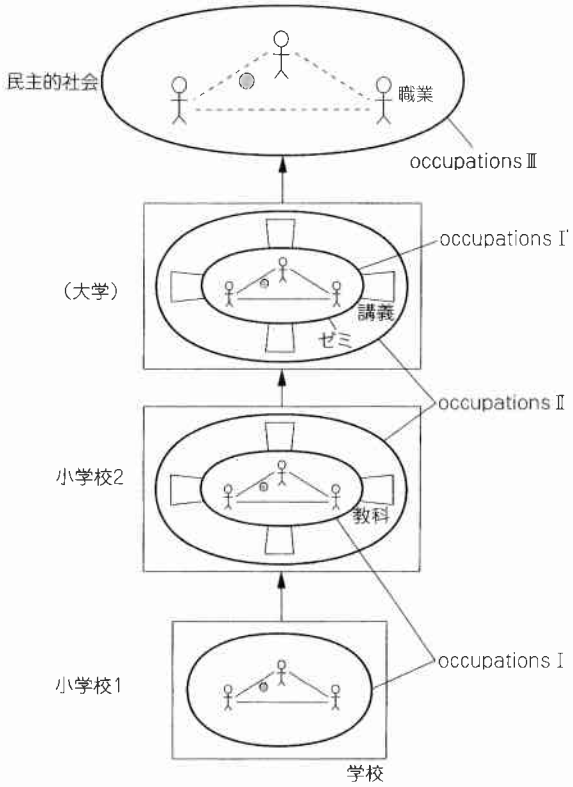
デューイはシカゴ大学に学部長（哲学・心理学・教育学）として在籍していた1896年に，付属実験学校（Laboratory School）を開設して自ら実践・指導を行った。はじめは生徒16人，教師２人。３年間だけの実践で他校へ統合されて終了した。この途中報告とさらなる協力を訴えた３つの講演と関連する論文をまとめたものが『学校と社会』であり，新教育のいわばバイブルとして世界的ベストセラーとなった。

導入された諸活動をデューイはまず《オキュペーションズ（occupations）》ととらえた。新しい教育は，「子どもをしつけておらずムチで子どもの心から悪魔を追い出していない神に逆らう行為」「単なる遊びで教育の名に値しない」などのような強い非難の中で行われることがあった。それらに対して『学校と社会』は，すでに広がっていた実践家たちの直感・実感に理論的根拠を与え，心の支えになったことが広く読まれた一因であろう。

《オキュペーションズ》は，活動的作業，仕事，労作，生活などと訳されているが，「占める」という語源は，「子どもが何かに心を奪われて，何かにとりつかれたかのように熱中・専心している」状態を表している。デューイは《オキュペーションズ》をさらに《胎芽的社会（an embryonic society）》ととらえ，それが価値高く美しく調和のとれた民主的な《大きな社会（a larger society）》に育つ実践を構想した。

《オキュペーションズ》には，仲間がおり，先達もおり，共通の目的と参加・コミュニケーションと調整がある。問題状況の中でその解決，目的の実現がはかられる。各自の居場所があり，役割分担が行われる。直接的な声や想像的な《声》のやりとりと議論がある。道具を使って集団的にモノや自然に働き

図10-1　Occupationsの発展（総合学習からゼミナール，そして民主的社会へ）



かけ，そのとき情報や知識を使ったり，知恵をしぼったり，科学を学び発展させたりする。必要性を感じる生活があり，生活陶冶がある。人間本性が開花していく生長（growth）がある。一体感があり安らぎがあり達成感がある。人間同士の連帯，自然との共生がある。外部の人間集団や自然との豊かなやりとりがある。これは小さくとも立派に一つの探究的生活共同体だといってよい。

「Occupationsの発展」を図にまとめてみた（図10-1）。この図を下から見てほしい。《一》（Einheit）なる細胞が，発達・分化・生長するイメージである。

日本では，「学級」がそういう共同体でもありうるが，明確には総合学習といわれるような諸活動が《オキュペーションズ》に相当する（I）。《オキュペーションズ》はその内部に分化した構成要素（教科や情報センターなど）を複雑に保ちながらその全体をも《オキュペーションズ》として発展する（II）。そしてついには，大きな社会になっていく（III）。このIIIのレベルでは，「共通の目的」は「社会的目的」になり，「道具」は「生産手段」になり，「役割分担」は「職業」になるなど，同じ構造が内容を社会的に拡大・充実させて出現する。occupationには，「職業」という意味もあるのである。直接的な「声（voices）」のやりとりは，vocation，calling（職業・天職）などの社会的で想像的な声のコミュニケーションになり，産業社会を編成する。

理解の補助線として大学のゼミナール（I'）を発展過程の間に入れてみた。日本では，文献研究を手堅く集団で行いながら，フィールドワークに出たり実験・調査に取り組むゼミが増えている。研究室は探究的生活共同体ともいえる。デューイの構想は，現実には今日の大学をイメージすると理解しやすい。総合学習と教科の関係も，ゼミと講義の関係で考えると，二項対立的発想を克服しやすい。特に中学校・高等学校で「総合的な学習の時間」で何をしていいかわからないという教師の悩みがあるが，大学時代のゼミを思い起こし，それぞれの学校で生徒たちと一緒にゼミを行うことを考えてみれば，やりたいことが次々涌いてくるのではないだろうか。

山崎英則編著『西洋の教育の歴史』ミネルヴァ書房，2010年。

写真1（上）／2（下）

古い砂を小型のブルドーザーを入れて廃棄し、新しい砂をトラック2台分入れます。

＊水道の蛇口は18か所設置しています。

＊夏のプールは4か所設置します。北海道の夏は短いので7月・8月の2か月しか遊べません。毎日清掃をして毎日水を入れ替えます。

＊園庭あそびの道具もプラスチック製品は使わずに、本物の鍋やボール・バケツ・剣先スコップなどを使用しています。

＊シャワー2か所と園内にお風呂を完備しています。たくさん汚してあそびきれいに身体を洗って食事をします。そのメリハリを大事にしています。

園庭全体であそびが深まりひろがる

園庭に砂場のくくりはありません。どこで水を流しても、どこで山を作っても穴を掘ってもかまいません。18か所ある水道の蛇口から、泥あそびに欠かせない水をふんだんに使って遊びます。また保育士はどのようにあそぶかという計画は持っていますが、こどもに強制することはありません。こどもたちは一人ひとり自分の感覚であそびに入ってきたり、仲間とあそびを作り出したり、一人で黙々とあそんでいます。保育士はその姿を大事にしながら、砂の感触を嫌がる子や人との関わりを避けてしまう子、なかなかあそび込めない子などを気にかけてさりげなく援助をするようにしています。

毎年5月の連休明けの日曜日に5歳児の親子交流会を催し、4か月雪の下で固まってしまった土を親子で掘り起こす作業をしてもらい、大きな砂の山をいくつも作り「園庭開き」を迎えます。もちろん雪が少し溶けてくるとすぐにこどもたちは土を見つけて泥だらけになりますが、この交流会での恒例の土起こしを迎えると、いよいよ本格的な北海道の泥あそびが始まります。黒い土が顔

写真3

を出し外の水道に水が流れる日がくることは、真っ白な雪の世界で4か月過ごすこどもたちにとっては、全身の感覚を持って春を感じることでもあります。

遠くに見えている築山（写真3・4）は園舎改築（約20年前）の時に作ったものですが、こどもたちがこの築山をスコップで壊し始めました。こどもたちは作るよりも壊すことを好む時期が長くありますが、この築山を壊し始めると中から粘土状の土が出てきて、この予期しなかった粘土の発掘がまたこどもたちの好奇心を駆り立て、何時間も何日もかけて粘土の発掘に夢中になっていました。もちろん業者がきちんと作った築山ですから、こどもの力で掘ることは容易なことではありません。こどもたちは剣先スコップを使い、腰を入れて力の限り黙々と掘っていきました。園庭はこの築山以外は平らな形状でした。しかし今では写真の通り常に凸凹していますがこれは全てこどもたちがスコップで作った起伏です。毎日こどもたちのあそびによって形を変化させていきます。一日たりとも同じ形状がない、危ないこと以外はやってはいけないことのない園庭です。保育園の関係者以外の方によく「園庭は工事中ですか？」と尋ねられることが多くあり、苦笑しながらもこどもたちの力強さを誇りにも思います。

【ゆっくり解説】古代の超技術 ローマンコンクリートの謎【古代ローマ】

301,954 回視聴・2021/01/25・ローマンコンクリートの耐久性の秘密と現代のコンクリート構造物の違いについてゆっくり解説。

【参考・引用元】

https://en.wikipedia.org/wiki/Roman_c...
https://www.jstage.jst.go.jp/article/...
https://www.jcassoc.or.jp/cement/1jpn...
http://www.nissailing.co.jp/concrete/...
https://en.wikipedia.org/wiki/Mount_V...
http://www.icoal.or.jp/ashdb/ashqa/as

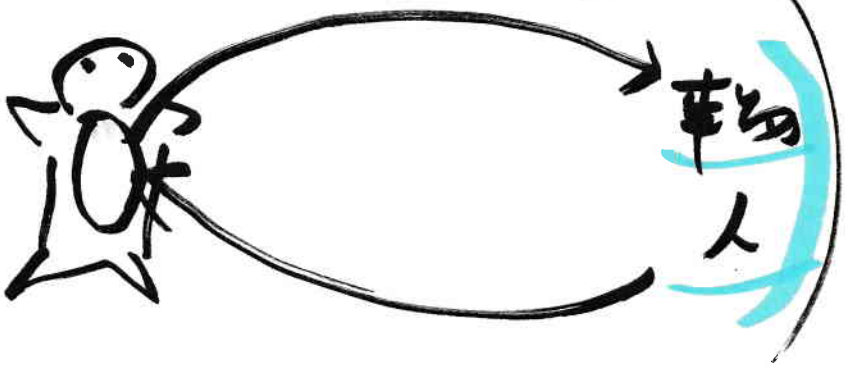
3 生活陶冶*

Das Leben bildet. … ?

中動態

life builds life

能動態



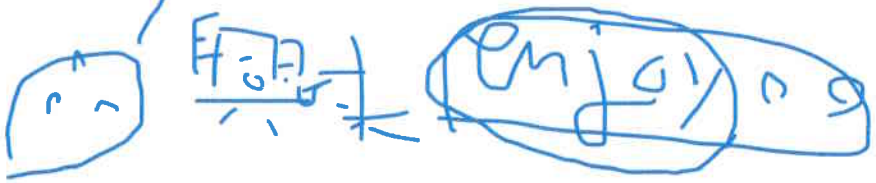
life is builded by life

受動態

Bildung

教養 Bildung 文化・教育内容

モダン
近代化
- 市民革命
- 産業革命
- 教育革命



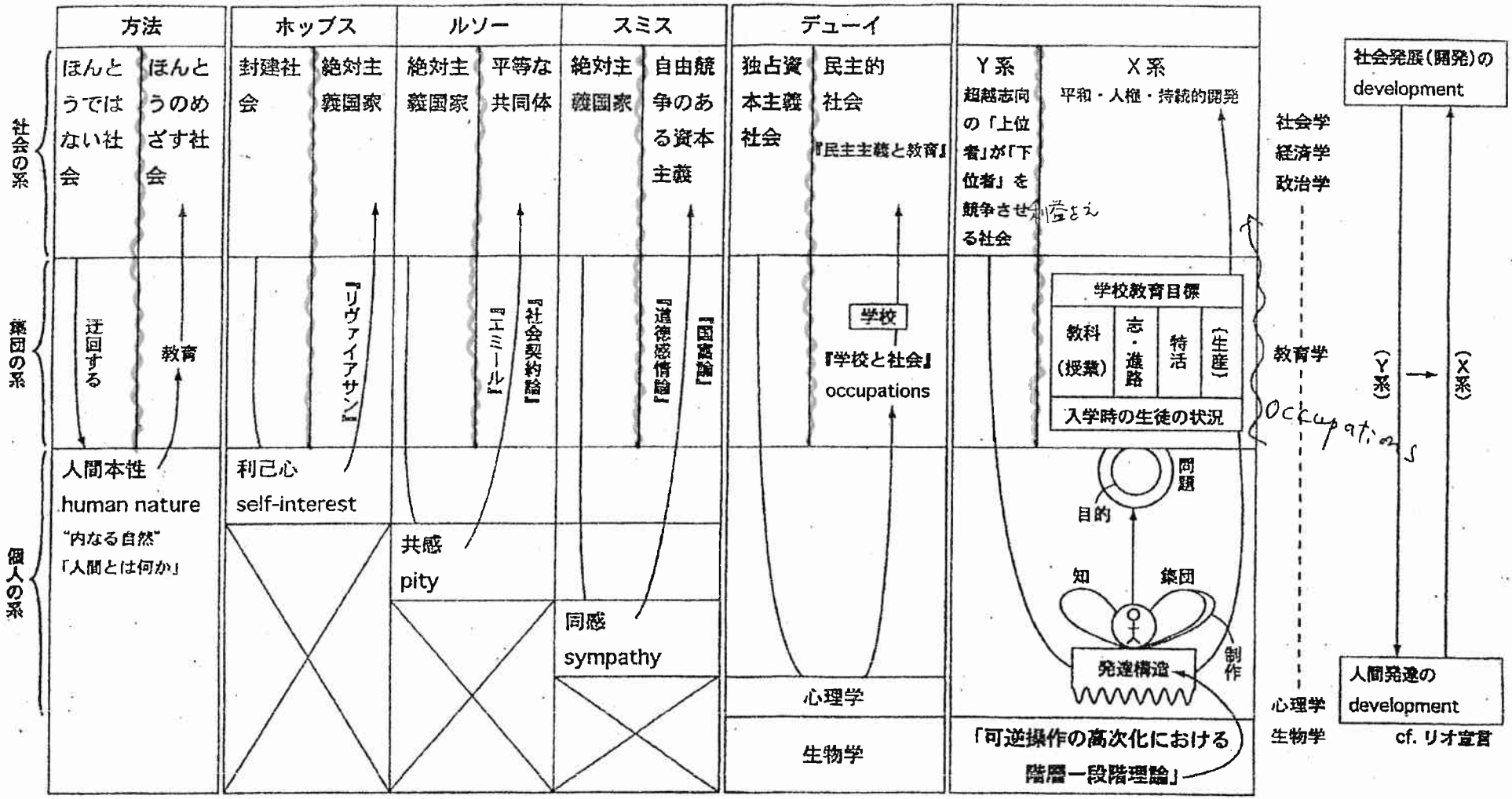
クリストファー・ハイド『ビジュアル大年表 137億年の物語』文藝春秋、2013年。

ロビンソン・クルーソー

人類

―３つの系―（社会の系・集団の系・個人の系）の発展

学説史 ⇅ 現実の歴史



（参考出典：内田義彦『作品としての社会科学』岩波書店、1992 年など。）

仏教：一切衆生悉有仏性（涅槃経）

儒教：大学之道、在明明徳、在親民、在止於至善。

格物致知 意誠 心正 修身 家斉 治国 平天下。

社会

違和感

↑

おどろき

もうできているもの

未熟さをエンジョイしよう

自分も現実態ととらえる